

物 生 の 夏 ら か 春

授 教 校 學 範 師 等 高 子 女 京 東

藏 七 堀

一

幼児の身邊にあるもので、幼児のすきな事物、現象は頗る多い。幼児は動くもの、變化の著しい物に注意をうばわれ、興味を感じるものである。したがつて、一般的にいえば、動物がすきである。いぬでも、ねこでも、またうまやうしのようなものでも、或はやぎでもうさぎでも幼児のすきな物である。ほとども、にわとりでも、またすいめやつばめのような、とり類で、もちろん幼児のすきな物である。

(1) うま、うし、やぎ。これら飼育せられる大きな動物は幼稚園内にとり入れて幼児に世話させることなどは、むろん出来ない。しかしうまやうしが野原に出て、はたらいているところとか、また野原につながら、草をくついているところなどで、幼児たちがうまやうしややぎをよく見たり草をやつたりすることは望ましいことである。これらの動物は従順で、人に危害を加えるものでないから、子供たちが小さいときからこれらの動物を愛護するようにありたい。それには、うまやうしになるべく親しむようにしむけねばならない。棒で打たり、石をなげつたりするような、いたずらをさせてはならない。

(2) いぬやねこ。これらは幼稚園でも飼うことが出来るとよいが、相當經費もかかり、世話もせねばならないから、幼稚園や小學校での飼育動物ではない。ことに、子供のうちには、大變にすきなものがあるとともに、大變に恐れるものがある。犬でも猫でも大變かわいがつていぢると、時にかまれたりひつかゝれたりして危害を受けることがあり、犬猫は却つて成育しないことになる。反對にいぬはこわがつて泣いたり逃げたりするとほえついたりおつかけたりするものであるから、よく注意せねばならない。

(3) うさぎ。幼稚園で飼育するならばうさぎの右に出るものはない。うさぎは子供たちの一番すきな動物であり、子供にも世話ができ手数のかゝらぬかわゆいもの

である。うさぎを飼うには箱がいが簡単である。リンゴ箱の蓋の一部分を竹すのこで打ちつけて固定し、蓋を一部分として蝶番づけにする。底に多少傾斜するようにして尿が一方に流れ出る工夫を施すとよい。いぬやねこがうさぎを殺すものであるから、飼育箱は丈夫につくり、夜でも晝でも犬ががらまないようにせねばならない。そしてうさぎのえさはなつばやいもくす、だいこん、にんじんなどの臺所くすでよい。只ぬれた物は絶対にやつてはならない。またたくさんにえさを與えることもよくない。また幼児はうさぎをいじりたがるものであるがなるべくいじらせないがよい。もしうさぎが子をうむときにはおすを別の箱にうつさねばならない。そして親うさぎの箱は暗いところにおき、うさぎの巢をのぞいたりいじつたりしてはならない。そしてうさぎのこどもが出たり来てえをさたべるようになるまで、そのまゝにしておかねばならない。これは親うさぎがそのこどもをふみつぶすことのないようにするためである。

一

とりも多くは春から夏にかけて卵を産むものである。にわとりの如く、年中卵をうむものでもひなをそだてるのは春がよいから幼稚園でとり類を飼うならばにわとりかほとまたじゆうしまつ、カナリヤのような小鳥類がよい。しかしにわとりでもはとでも、相當えさに費用を要するからその積りでかゝらねばならない。にわとりはふすまとか、麥類とかとうも

ろこしの如きえさが必要であり、また菜類もお魚の臍物の如きものも必要である。

にわとりを飼う場所は日當りがよく、常ににわとりが土をふむことが出来るようにせねばならない。そしていぬやねこにとられないように、またとりぬすびとにもぬすまれないような設備をせねばならない。それで幼稚園に常宿の人があつて、充分にわとりの世話をすることが出来る場合の外は飼育出来ない。幼児や保母の人達が日中だけ世話をすることが出来る位ではにわとりの飼育もはとやことりの飼育も計畫せぬ方がよい。ことりはカナリヤとかじゆうしまつのよう、すりえさでないものを飼育する方がよいが、それでも年中宿直や日直をする人がいなくてはならない。凡てとり類には常に水を與えて置くことを忘れてはならない。すりえをやるうぐいすとかめじろなどでも時々水浴ができるように常に水を入れた物を備えねばならない。

すゝめ、つばめとか、からすやとびなども幼児の注意をひくものである。すゝめがどんなところに巢をつくるか、つばめがどんなにして巢をつくり、ひなをそだてるか、すゝめのとび方とつばめのとび方と、どんなにちがうか。すゝめがどんな歩き方をするか、つばめがあるくかどうか。からすの歩き方はどんなか、からすとんびととび方がどんなにちがうかなど、幼児の注意をひくものであるからよく觀察させるがよい。またすゝめはどんな物をたべるか、つばめがどんな物をとつてたべるかなども注意させるがよい。勿論いろ／＼の

とりのなき方もきくわけさせたり真似させることも面白い。

三

かえるでも、こい、ふな、金魚でも、またかめなどもこのすきな動物である。これらは費用も手数もあまりかゝらずこどもに世話させることが出来るから、保育室で飼育するがよい。

(1) 三月末から四月にかけて川や池また田に行くとかえるの卵が澤山にある。ひきかえるの卵はひものようになつていて、他のかえるの卵はかたまりになつてゐる。この卵をすくつてバケツにでも入れてもちかえつて水族器で飼育するがよい。古い洗面器かガラス鉢のまん中に石を入れて水面から多少出る位になし、それに土と枯葉と水などを生かして池の水を入れて置く。この水族器におたまじやくしを十二三も入れて飼育し、日光の直射せぬような所に置く。かえるの卵を水族器に入れてその變化を見るのも面白い、かえるの卵は四五日でかえる。いつ、初めて動き出すか、いつ、親かえるが卵を保護するために産出しておいた寒天からはなれるか。初めおたまじやくしはえさを必要としない。丁度にわどりの卵の中にひなとなる養分が貯えられてあるように、かえるの卵にもおたまじやくしの養分がある。しかしおたまじやくしが卵からかえると、多分にえさをとらねばならない。おたまじやくしが蛙になるまで二ヶ月もかゝらない。いつ、おたまじやくしにあしが出来るか。いつ、尾がなくなるか。尾がなくな

らない中に四本のあしが出来るると小さなかえるになる。そして時々水面からはなを出し、また水からはえ上かつてかえるになりかける。尾がなくなると小さなかえるは水中の生活をやめる。したがつて水族器から外に出るもので草原などにはなしてやらねばならない。

かえるは面白いもので、その運動する有様などは子供の興味をひくものである。

(2) 春小さなあみをもつて小川や他のところに行けば小さな魚類を捕えることが出来る。是等を水族器に飼育するがよい。どじょうでもめだかでもよい。ふなやこいや金魚ならばなおよい。金魚は賣つてゐるものを求めてきて保育室で飼育してもよい。

ふなは硝子鉢にそのいたところの水を入れ、水草を入れて二三日飼つておく。そしてその泳ぎ方などをよくみたならば、またもとの川や池にはなして置く。そうしないと死んでしまふ。

もしえびを捕えることが出来たならば、そのいたところの水を硝子鉢に入れ、水草なども入れておいて、一、二日飼つてその泳ぎ方などをよくみるがよい。

こいは幼稚園に池があればそこで飼うがよい。
(3) 金魚にはいろいろ種類がある。わきんは一本尾で最もふなに近い形をしている。體は細長く各のひれが短い。性質は強健で多く飼育せられる。色はうすあかと少しづつのもよりのあるものもある。保育室で飼うならばこの方がよい。り

うきんは尾が三つに分れ、一名尾長ともいつて胴が短く、腹がふくれ、どのひれもよく發育し、尾が大變に長い、でめきんは體は細く、眼球がとび出ている。色は黒、赤、白、黄などで中にはふの入つたものもある。らんちうは一名まることもまたししかしらともいう。胴やひれが短く、尾は三つ尾で、せびれがない。頭に肉こぶの出來たものをししらんちうといひ、出來ないものをらんちうという。

以上のわきん、りうきん、らんちう、でめきんの四種が金魚の原種である。そしてこれらのかけ合せによつていろ／＼な變種が出來る。りうきんとらんちうとのかけ合せたものはわらんちう。わきんとらんちう、でめきんらんちうとでめきんででめらんちう、わきんとでめきんをかけ合せて朱文金というように、いろ／＼ある。朱文金は和金に似て一本尾であるが、非常に尾が長く、體全體にもようがある。紅めだかは和金とほぼ同じ形でふなに色をつけたやうなもので、性質は至つて頑健である。大きさは三四纏で色はうすすべである。金魚のめす、おすは見方が困難である。一般におすはめすにくらべて體が小さく、腹は常にふくれていて、どこことなく容色がよい。産卵期になるとおすは胸に白い點が出來、腹を押すと白い液が出る。

金魚の産卵期は五月上旬で産卵力の最もさかんなのは四年子である。三月下旬か四月上旬にめす一尾におす二尾位を産卵池に放す、適當な場所に魚巢(柳の根又はわらを束ねたもの)を備えておくと、朝、産卵するものである。産卵がすむ

と、直ぐに親金魚を他の池に放つ。これを怠ると、親金魚は生んだ卵を食するものである。魚巢は水温二十度位のふか池(水の深さ十纏位)に入れかえる。一回の産卵数は最少七萬粒から二十萬粒である。ふか池に入れて三日位たつと、一つの卵から一つの黒點が出來る。これが眼で、五日か七日目位で完全にかえる。かえつたばかりの金魚は體が黒色で、腹に小さな袋をつけている。これに養分が入つてゐるが、二日でおちてしまつと、同時に運動を始める。このとき魚巢を除き、一度水を入れかえ、餌として米七分もち米三分をこくこまかなに粉にして與える。かくて十五日もたてば小鉢に入れて、よいものとひれや尾の不完全なだめなものを選別する。三十日位たつと、ため池へはなし、醬油かす、麥粉などを與える。また時々人糞尿を池面にまいて、害蟲の捕獲に努めると同時に一方、金魚の變色成育をはかる。ふか後、四ヶ月位で第二回の選別をする。この時は長さ三纏位になり、色もはつきりしているから色を主として選別し白色のものをすてる。このときから、えさは何でもかまわぬ。

以上は専門的に金魚のふか繁殖をはかるもので、幼稚園小学校などで出來ることではない。もし趣味としてやるならば紅めだかで、産卵からふか飼育を試るがよい。現に私は昨年實驗したためだかの子が窓際の水族器に元氣でゐる。

(4) 金魚を水族器で飼うときには、水族器の大きさによるが、多く入れないようにせねばならない。その水族器は底にきれいな砂又は小石を五纏ばかり入れる。そして水草の根を

砂の中に入れて、小石でとめて置く。うき草ならば水を入れた後その上にかべて置くがよい。水族器に水を入れるときには、植物の根が洗い出されないように、手の上に水を静かに注いで流し込むようにする。水族器には池の水が一番よい。そして水族器のふちまで水を入れる。それで植物と動物との量が適當ならば水をとりかえぬがよい。

水族器に金魚を飼うときには、えびやかめやいなやけんごろうなどを共に入れて置いてはならない。これらのものは金魚を食し、また害するものである。しかしおたまじやくしを入れて置くがよい。すると水族器に生ずる緑色のねばりけのある物を食つてしまう。水族器は夏ならば北又は東窓の日蔭のところ、冬ならば日當りのところに置かねばならない。

(5) 金魚にはえさを多く與えてはならない。或るべく控え目に朝夕二回に與える。金魚がたちまち食いつくす位な分量がよい。金魚は食いすぎると腹がふくれところり／＼と死ぬ。ありの卵、パン、かつをぶしのけづりくす、魚粉などが金魚のえさとして最もよい。えさを與えるとき、小さな鈴をならすと集つて来て、すぐに食するようになる。

金馬を硝子鉢に飼育するときは、少くとも一週に二回水を取替えねばならない。きれいにするため毎日とりかえるのもよくない。金魚が水面でパク／＼するときには、水中に空氣が缺乏して困つているのであるから水をとりかえるか、その水を汲出して五六十種のところから注ぎ入れて水に空氣を

とかしてまねばならない。それでも最もよいのは二個の硝子鉢を準備し、一週二回一つの硝子器からよい水を入れてある他の硝子器に金魚をうつすがよい。しかしその水はしばらく放置して元の硝子器と同温度であるようにせねばならない。保育室で金魚を飼うときには幼児が鉢の水中に手を入れないようにせねばならない。

害蟲にやられた金魚は元氣がなくなりつや悪くなり魚群をはれて水底にいたり、水面へ背を現わしたりする。そして少しの物音には驚かなくなる。

糞が黒く長く續くのは健康な金魚、糞の白いのはえさが不足か、病氣。糞のきれ／＼なのは病氣である證。金魚の主な病は體に白斑を生ずる粗腐病、鰓や口のくさる鰓腐病、うころがさか立つ松皮病、尾ひれがたぶれるびらし病、體に白絹をつけたようになるねまり病などである。病魚が出来たら、その病魚を他に移し、鉢の水をとりかえる。うすい鹽水で病魚の體を洗い、滋養物を與えると次第に回復する。金魚にしらみが寄生すると金魚は容器のふちに體をこすりつけて泳ぐから白い茶わんなどに入れて蟲を見付けその蟲をとつたあとに煙草のうすいしるをつけてやるとよい。

(5) かめも幼児のすきな物の一つである。いしかめを飼育するには水族器に僅か水を入れ、甲を干すことが出来るように必ず石を入れてその上に出ることが出来るようにせねばならない。かめは魚類と異り、空氣を鼻の孔から呼吸するものである。餌としては時々みみず、おたまじやくし、どじょう

のようなものを興えるがよい。かめはまた植物性のものをも食するものである。かめは大變に面白いものであるから、机の上をはわせたり、床をはわせたりしてもよい。しかしふむと甲がくだけるから幼児たちにいたすらをさせない方がよい。

(6) えび、かに、やどかりなども幼児が興味をもつ。これ等は硝子鉢、バケツなどに二三日飼育してそのおよぎ方やはえ方などをよく観させるがよい。はまぐり、あさり、しじみなどは二三日飼育出来る。はまぐり、あさは海にすみ、しじみは海にも川にもすみ、いずれも浅き水底の砂泥の中にしそみ、殻を少し開いて下側より足の先(普通舌と思われている)を前方に出し、これを伸縮して砂泥を押分けて徐々にはう。又體の後端の管を伸して殻の間より出し、常に水をして下の管から左右の膜の間に流れ入り、上の管より流れ出させる。流れ入りたる水中にまざつてゐる微細な生物が口に達すると、これをとつて食う。糞は體の後端の上の管から水と共に流れ去るのである。生きたかひの飼育觀察は出来なくともはまぐりのその他の貝殻を集めて遊ぶことは幼児にはまことに面白い。

(7) かたつむりは陸上にすむ巻かいで、幼児の面白がる物である。中にはかたつむりを大變に恐れる幼児がいることもある。かたつむりは五月雨の頃ふきやめうが、しようがなどの生えているところ、また竹垣のところ、あじさい、やつでなどのところをさがすと大きなものがみつかる。これらをし

めつた砂や泥を五六粒の深さに入れた硝子鉢に入れて布片かハトロン紙などで蓋しておく。容易に飼育出来る。かたつむりは濕氣があるところをはつて若芽をなめたりまた腐つた物などを食するものである。乾くと殻の中にとじこもつていわゆる夏眠をする。二月でも三月でも殻の中にとじこもつていても死なない。氣をつけてみるとかたつむりの巻き方に二通りある。左巻まいまい。右巻まいまいとある。また殻のすじの數で一すじまいまい。二すじまいまい、三すじまいまいという區別がある。

四

(1) 春から夏にかけてさく花は頗る多い。うめをさきがけとして、さくら、もも、すもも、なしの花、つばき、あぶらな、れんげ、たんぼぼ、すみれ、また、つつじ、きりの花、ふじ、はなしようぶ、しやが、いちばつ。山吹、こぶし、もくれん、杉、松、柳、もみじ、桑、なら、柿、栗など、いろ／＼の木にも草にも花がさく。是等の花を採集して瓶に挿し、保育室に陳列してその名稱、花の形(状色や香など)比べさせる。また名稱のあてつて遊びをさせても面白い。花を集めるときには公園や私有園などから採集してはならない。また同一種類では一本あれば澤山である。むやみと折り取ることをさげねばならない。幼児は破壊本能があり、蒐集本能があるので、とかく草花でも木の枝でもむやみと折りたがるものであるから、それをさせないように導かねばならない。

頭から叱ることはよくない。樹木でも草花でもまた葉でも必要もないのに折つたりしたためたりしないようにさとさねばならない。また採集したものは、すてたり枯したりしないように、瓶に生けて室内を飾るようになさせるがよい。

お天氣のよい日に幼児を春の野につれ出してあそばせ、春咲く草花などを、なるべく多く採集させるがよい。もちろん一種には一二本、一にはおなじものは一二本だけ採集させる。必要がないものは多く折とつてはならない。なるべく葉も根もつけて採集させることが出来る。と結構である。そして採集箱に入れて枯れないように持歸り、花瓶にさすか、鉢植にするがよい。つみ草や花束つくりといつて、要もない草花をむやみと多くちぎることは悪い風である。草花にも木の實にも毒のあるものがあるから、むやみに草花や木の實などをとらないとともに、これらを口に入れたりさせないように注意せねばならない。ことにままごと遊びに使うものには注意をはらわねばならない。

春さく花の形や色についてくらべて見ると面白い。白い花のさくもの、赤い花のさくもの、紫の花のさくもの、また黄色のものなど、いろ／＼ある。また大きな花と小さな花とで分けて見るのも面白い。また形の似たものと違つたもので分けて見るのも面白い。また葉についてもくらべて見るとよい。細い葉、圓い葉、大きい葉、小さな葉、ふちのぎざ／＼のある葉とぎざ／＼のない葉、すべてこい葉とそうでない葉と、いろ／＼にくらべさせたりさがしをさせたりして遊ばせる

とよし。

(2) 花がどうしてあんなにきれいに咲くものであるか。昔は誰もそれを知らなかつた。一つの花の花粉が他の花のめしべに運ばれて結んだ種子が最もよいものになることは今日では明白となり、そのおしべの花粉がめしべに運ばれるために、花にいろ／＼の工夫が出来ているのである。風や水で、またみつばち、が、ちよう、はえ、あぶ、かぶとむしの如き蟲にでも花粉が運ばれ、時には人によつても運ばれるのである。これらのことはもちろん、幼児に説明してはいけない。しかし花にくる虫をよく観させたり花の有様をよく観させることはまことに結構である。

花をおとすれるもので、最も面白いのは虫である。注意して花の形状を見ると、虫が花に入るのに工合よく出来ていることが分る。つじの花は多く横にななめ上に開き、上のは花瓣にもんがあつて蝶などの眼につきやすい。蝶が管のような口をのぼして上の花瓣のものとひだになつて一本のおしべがはさまつたところから出る蜜を吸う。その蜜を吸う蝶の體におしべの葯がふれる。すると葯の上方に孔が二つ開いて、糸でつづられた花粉が出るようになってゐるから、花粉が蝶の體によくつく。それが他の花をたすねて蜜を吸うときその花のめしべの先に花粉がつくといつた、誠にうまいしかけになつてゐる。

ふじの花でもはなしようぶでも、またかきの花でも栗の花でも、それ／＼いろ／＼な虫を呼ぶようになしかけになつてい

る。氣をつけて見るとまことに面白い。幼児にはそんなことは分らないが、見るとだけは見させるにこしたことはなし。

それで花にはそれ／＼、集まる虫がきまつている。ふじの花にははち、あぶ、つづじには蝶、かきの花では蜜蜂、栗の花にはえやあぶなどが集まっていることが多い。大體、白い花には夜、がが多く集まり、派手な花には蜜蜂や蝶、悪い臭を出す花にははえの集まることが多いものである。どんな花にどんな虫が来るか、注意させることも面白い。

てんとうむしがどんなところにいるか。ありはどんなことをしているか、幼児は小さな虫にもよく注意するものである。

(3) 花壇にいろ／＼の草花をつくつたり、そらまめ、えんどう、きうりやかぼちやまたトマトやナス、或るいはじやがいもやさといも、さつまいもなどを栽培して幼児とともに草とりをしたり水をやつたりすることは幼稚園の庭がせまくとも、多少工夫すれば出来る。また瓦鉢でもお菓子箱でもよい、土を入れてあさがおの種子をまいて世話させる位はこの幼稚園でも必ずさせたいものである。

〔二九頁から〕

これをつとめていえば、幼児を幼稚園へでなく、幼稚園を幼児へである。もつと、くつきりしたい、かたをすれば、幼児に幼稚園を作らせるのである。ことしの幼児に、ことしの幼稚園を作らせるのである。つまり幼児を古い幼稚園へ押し込むのでなく、新しい幼稚園を幼児に興えようとしてこそ、新入園児を迎える眞の心ではあるまいか。

といつて、幼児の御きげんをとるというのでもなく、幼児のわがまゝを放任するといふのでもない。苟も幼稚園たる以上れつきとした教育目的を失わない。それでこそ幼稚園に入れるのであり、親も亦、幼児を幼稚園に通わせるのである。しかし、その新入園児を迎える心としては、どこまでも、その子をその子として迎える心である。先ずこの心で迎えることなしに、眞にその子を幼稚園に入園させることは出来ない。——新しく来る一人々々の子。これを離れて新入園児を迎える心はない。

(東京文理大兒童研究會『兒童研究』昨年四月號所載抜録)

X X X X X

X X X X X